



うえ だ か な よ
上田假奈代さん

(NPO法人こえとことばとこころの部屋代表)



若者やホームレスの人たちと 社会をアートでつなぐ

仕事とは、自分らしく社会と関わること

NPO法人「こえとことばとこころの部屋」は詩人・上田假奈代さんが芸術や文化活動を行う目的で設立した。2005年9月、イベントスペース「ココルーム」に、大阪市から委託を受けた就労支援カフェが併設された。

「ボランティアを呼びかけるうち、役者志望や音楽家志望の人たちに混じって、無職で“何をしたいのかわからない”という人たちがたくさん来るようになったんです。一方で仕事をもっている人たちも悩んでいる。もともと仕事について興味があったので、みんなで考えてみようと思ったのがきっかけです」

上田さん自身にも長い仕事探しの時期があった。コピーライターは利潤最優先の体質に嫌気がさして辞め、料理人は4ヶ月で体の限界がきた。フリーライターをしていた30歳を過ぎた頃、知り合った男子大学生に「詩を仕事にしたいんですよね」と言われて言葉に詰まる。2週間後に彼は飛び降り自殺をした。

衝撃のなかで「仕事ってなんだろう」「詩を仕事にするってどういうことだろう」と、とことん考えた。そして、「仕事とは、お金儲けよりも自分らしく社会と関わること。詩人の仕事とは、あきらめや絶望のなかにいる人に勇気を届けたり、悲しみに寄り添ったりする“言葉の力”を届けることじゃないか」という思いに行き着く。やがて「詩業家」を名乗り、表現にまつわるイベント企画やワークショップなどの活動を始めた。

出会いとトラブルを重ね、自分自身が変化した

カフェには人とうまくコミュニケーションをとれないニート、ひきこもりの若者やホームレスの人が訪れる。迎える自分たちが試されているのをひしひしと感じる。

「特に、仕事もお金もない人がカフェに来た時にど

うふるまうのか、すごく悩みました。スペースの運営費は行政の支援を受けていますが、私を含めたスタッフ5人の生活は1杯300円のコーヒーを売ってどうにか成り立っている状態なのです。結局、掃除などを手伝ってくれた人には食事を出すことになりました」

厳しい背景をもつ人ほどあいまいな姿勢を鋭く見抜き、見切りをつけたら二度と来てはくれない。日々現場で起こるトラブルへの対応を瞬時に判断し、言語化し、スタッフ間で共有することが重要だ。

こうした経験を重ねるうちに、上田さんの詩も大きく変わった。

「まず言葉が変わりました。小難しいことは書かなくなりましたね」。ある人は「上田假奈代の詩は一見下手になったようで、実は一回転して進んだんだよね」と評した。今は、出会った人や事象をそのまま記録する「記録詩」に取り組んでいる。これも生き方に悩む若者やホームレスの人との関わりから生まれた発想だ。

「やっていて面白いですね。必要とされているようで、実は私自身がみんなを必要としているように思います。出会いが多いかわりにトラブルも多いんですけど（笑）、たくさんの気づきがあります」

カフェに掲示されている求人情報から就職したニートの若者もいるが、現状は甘くない。従来の仕事観では限界があると上田さんは感じている。

「これからは“教育”“ビジネス”“福祉”“農業”など異分野と若者やホームレスの人たち、そして大人や子どもたちをつなぐものとして、表現やアートの可能性を探ってみたいですね」と思いを語った。

ココルーム

大阪市浪速区恵美須東3-4-36 フェスティバルゲート4F

tel 06-6636-1612 12:00~22:30 (無休)

<http://www.kanayo-net.com/cocoroom/>